

レトリックの分類と定義

—その混乱と曖昧性—

● 村越 行雄

ギリシャ語で言えば *rhetorike*、英語で言えば *rhetoric*、カタカナ書きにすれば「レトリック」になるが、この語はいくつもの意味で使用され、いくつもの異なる日本語訳になって現れている。辞書、辞典、著書、論文など様々なところで、弁論術、修辞学、雄弁術、比喩、美辞麗句、その他の多くの訳語として現れている。英語であれば、*rhetoric* という語が1つあるだけで、同一の語が異なる意味で使用されるが、日本語も同様に、現在ある多くの訳語を排除して、「レトリック」という語だけにして、その語を異なる意味で使用するとしても、結局のところ、多くの異なる意味で使用されることには変わりなく、互いに異なる意味が混乱を引き起こし、曖昧性を残すことには変わらない。訳語の多さという表面的な混乱は取り除くことができても、その代わりに、同一語の使用の曖昧性が大きな問題になってくる。根本的には、混乱と曖昧性を取り除くしかない。現在、著書、論文、新聞、雑誌、インターネットなどの媒体を通して情報を得ることが主流になっているが、その情報源に混乱と曖昧性があれば、その情報源に大きく依存する大学生、大学院生、一般の人々、さらには研究者、大学教員までもが影響され、混乱と曖昧性の真っ直中に引き込まれ、さらなる混乱と曖昧性を生み出すことになる。そこで、レトリックの分類と定義に関する混乱と曖昧性を取り除くことが重要であると考え、これまでいくつもの論文で取り上げてきた^①が、それらをまとめる形で記述することにする。過去の論文とは重複することになるが、新たな視点から見直すことにする。

1: 「レトリック」という語

「レトリック」(*rhetoric*)という語は、いくつもの意味で使用されている。その多様な意味は、それなりの理由がある。意味の多様性はまさにレトリックそのものの歴史を反映するものである。レトリックの変遷の中で、異なる目的が設定され、異なる役割を演じてきた。しかも、それぞれの目的や役割は歴史の中で決して消滅することなく、全てが現在にまで継承され、現在に至っている。その点が明らかにならない限り、多様な意味はただの混乱と曖昧性にすぎないものになってしまう。

レトリックの歴史は、一般的に捉えられているのは、紀元前5世紀に、ソフィストであるコラクスと弟子のティシアスから開始したとされている。その始まりは法廷での弁論であった。ソフィストには、「万物の尺度は人間である」と言ったとされるプロタゴラス、「言論は力である」、「弁論術は説得術である」と言ったとされるゴルギアスなどが特に有名である。そのようなレトリックの歴史の出発点に位置するソフィストのレトリックだけでなく、紀元前5世紀のアテネという都市国家で活躍したのがイソクラテスであり、ソクラテスとプラトン（なお、ソクラテス自身の文献はなく、プラトンの対話編で登場する人物としてソクラテスが語るのも、両者を同一の扱いにする）である。これらのソフィストのレトリック、イソクラテスのレトリック、ソクラテス・プラトンのレトリックの3つが古代ギリシャ時代の主流である。なお、プラトン自身はソフィストを徹底的に否定し、それが現在にまで続くほどの最も強力な敵対者であった。それだけでなく、

レトリック自体にも否定的な態度であった。従って、レトリックの3大潮流の1つに入れるのは、プラトンの弟子であるアリストテレスが、ソクラテスとプラトンによる真理探究の為の弁証術としての哲学の重視と説得術としてのレトリックの否定の跡を継いで、哲学（弁証術）を重要視することには変わらないが、レトリック（説得術）の果たす役割も十分認め、ソフィストを否定する一方で、レトリックを受け入れてレトリックの体系化を行ったからである。その後を受けて、古代ローマ時代にキケロやクインティアヌスに引き継がれ、アリストテレス→キケロ→クインティアヌスという古典レトリックが形成され、それが正規の、正統派の古典レトリックと言われるものである。

古典レトリックの後、中世、近代へと進み、レトリックは変化して、修辞学と呼ばれるものになる。その理由の1つとして、ローマ帝国を経て、封建領地へ、近代国家へと移行するにつれて、都市国家において直接民主制という形で繁栄した民主制は終焉し、市民が自由に大勢の市民たちの前で言うような弁論の場は失われ、支配的な力によって市民の自由な発言が圧殺された。その為、レトリックは弁論術として機能することができず、修辞に閉じこめられ、それに特化していった。その過程の中で、レトリックは公的な場での表現という表舞台から降りて、消滅したとされる。再び、民主主義の広がりを受けて、レトリックが表舞台に立って、復活されたと言われるのが20世紀以降で、比喩論と呼ばれるものになる。

古典レトリックは弁論によって人々を説得することを目的にする説得性と特徴づけられるのに対して、中世・近代レトリックは言語表現を巧みに、美しく飾る修辞を目的にする装飾性と特徴づけられるものになる。現代レトリックは全ての領域における言語表現の土台になる比喩を目的にする表現経済性と特徴づけられるものになる。レトリックの歴史は、アリストテレス→キケロ→クインティアヌスによって体系化された古典レトリック（＝弁論術）においては、発想、配置、修辞、記憶、発表の5つの部門から構成されたが、中世・近代レトリック（＝修辞学）では弁論術の1部である修辞が中心になり、現代レトリック（＝比喩論）では修辞学の1部である比喩が中心になるという過程を経ることになる。つまり、弁論→修辞→比喩という縮小過程である。見方を変えると、公的な場での市民全員を対象にする弁論から、あくまでも言語表現における修辞であって、しかも巧みに美しく飾ることは、例えば、詩や文学などのような芸術的な領域に限定されてしまうが、言語表現における比喩は科学や芸術から日常生活までの全ての領域における言語表現を対象にし、その土台に比喩があると認識される。従って、レトリックの歴史は単純に縮小過程であると済ますことはできず、レトリックの関わり方は歪なものになる。ともかく、そのような歴史を経た現在、弁論術、修辞学、比喩論が消滅することなく存在し続け、混在し、共存している。そう考えれば、「レトリック」という語は、日本語訳としては、大別すれば、「弁論術」、「修辞学」、「比喩論」の3つが可能になり、しかもそれぞれは異なる意味を持っており、一緒にすべきものではないことが明らかになる。

2：「弁論術」と「修辞学」の区別の仕方

「弁論術」は話し言葉で、「修辞学」は書き言葉に関するものであると言われることがある。両者の相違を明らかにする為の1つの方法としては可能である。古典レトリックにおける弁論は、アリストテレスによると、議会における審議弁論、儀式（葬式など）における演説弁論、裁判所における法廷弁論の3つがあり、それぞれが口頭での弁論になる。端的に現れるのが、弁論術の5部門の内、記憶と発表である。あくまでも大勢の市民たちを相手に、弁論する内容を記憶し（下書き原稿を記憶したり、あるパターンに沿って大まかな道筋を記憶したりする）、それを大勢の

前で発表することになり、口頭による弁論という話し言葉に関係するからである。また、説得手段として、アリストテレスはロゴス（言論、論理）とエトス（聴衆の感情）とパトス（弁論家の性格）の3つを挙げているが、特に後者2つは聴衆を前にして発表する際に求められるものである。聴衆を前にして、弁論家は自分の性格を表し、聴衆の感情に訴えかけることで、聴衆を説得する。説得とは、相手の納得があって初めて成立するものであって、相手の納得がなければ、強制的に押し込めるにすぎないことになってしまう。相手が納得する為に、ロゴスとエトスとパトスの3つを使って納得させるのであって、それで説得することになる。特に後者2つは話し言葉に関係するものである。それに対して、弁論術の5部門の内、発想と配置と修辞は記憶と発表の前段階として、例えば、下書き原稿のように、書き言葉に関係し、3つの説得手段の内、ロゴスは書き言葉に関係すると言うことができる。

そのような区別は可能であるが、混乱を引き起こすことにもなる。古典レトリックにおける話し言葉と書き言葉は、共に弁論の為のものであって、ただ口頭での弁論と弁論の下書き原稿の相違にすぎない。しかし、中世・近代レトリックにおける書き言葉は、弁論の為のものではなく、弁論なしの修辞にすぎない。それに、アリストテレスが『弁論術』を書いた紀元前4世紀の都市国家では、それ以前も同様であるが、話し言葉が中心で、書き言葉も話し言葉を意味した。弁論だけでなく、詩なども全てが話し言葉を前提にするものであった。例えば、口頭発表前に準備された下書き原稿であったり、口頭発表後に残す為の記録であったりした。また、教授の為のテキストも話し言葉を前提にするものであった。従って、中世・近代における口頭発表なしの、それ自体で独立した書き言葉という意味ではなかった。その意味から言えば、弁論術の5部門である発想、配置、修辞、記憶、発表は、全てが発表の為のもので、それによって聴衆を説得することが目的であった。それは、話し言葉による聴衆の説得を想定し、互いに関係づけて体系化されたものである。それらから勝手に取り出して、発想と配置と修辞が書き言葉で、記憶と発表が話し言葉であるという具合に区別できるものではないし、5つ全てが話し言葉を想定して体系的に結び付いているものを崩すことはできない。簡単に言えば、古典レトリックの修辞と中世・近代レトリックの修辞は全く異なるもので、それを無視して共に書き言葉であると断定できるものではない。

ソフィストであるゴルギアスの弟子であるアルキダマスとイソクラテスの対立は、話し言葉と書き言葉の対立として知られている。アルキダマスは、即興で、臨機応変に、聴衆の反応を見ながら弁論するのが最良の説得の方法であって、事前に準備し、その通りに弁論すると、聴衆の反応に適切に対応できず、説得は不成功に終わってしまうと考えた。イソクラテスは、事前に詳しく調べ、順序などの展開をきちんと考え、下書き原稿を作り、それを発表することが最良の方法であり、即興では言いたいことがうまく言えず、説得は不成功になると考えた。プラトンが哲学学校アカデミーを創設する少し前に、イソクラテスは修辞学校を創設し、2つの学校は当時の都市国家アテネで人気を博した。しかし、イソクラテスの修辞は説得を目的とする弁論の為のものである。あくまでもその為に、修辞を独立したものとして、それ自体で学生たちに調査・研究・訓練を教えたのが修辞学校である。

結局、「弁論術」という語は、古典レトリックの特徴づけの為に使用されるものであって、その中に修辞はあるが、あくまでも弁論という話し言葉の一環として位置づけられるものである。それに対して、「修辞学」という語は、自由な弁論の場を失った中世・近代のレトリックにおいて見られる特徴づけであって、「弁論術」の中の修辞とは根本的に異なるものである。そう考えれば、安易に話し言葉と書き言葉で区別することは危険である。

3：「レトリック」と呼ばれる技あるいは術

古代ギリシャ時代の rhetoric は、弁論を意味するが、また弁論の技あるいは術も意味する。ただし、the art of rhetoric とよく言われるように、art は弁論に関する「技」、「術」、「技術」（3つとも「わざ」のことであるが、「技」は職人技で、「術」は技を高度に発展させたもので、「技術」は機械化による近代的なもので、技と術を機械化によって合わせ持つものであるという具合に区別して使うことにする）のことであって、職人の技と同様に実践的な技のことであり、技をより高度に発展させた実践的な術のことである。弁論の技であるとするれば、弁論の理論、弁論の体系などのように、弁論を理論化したり、体系化することはそこから逸脱するとも言える。そう考えると、ソフィストのレトリックこそがまさに説得する為の弁論の技であって、ひたすら聴衆をいかに説得するかが目標になると言えることになる。ソフィストにとっては、あくまでも実践教育であり、実地訓練であって、職人が自らの技を教え込むのと同様である。そして、理論的に、体系的にレトリックをまとめたアリストテレスの著書 Rhetoric を『弁論術』と訳すのは、単なる弁論の技であるとするソフィストを否定して、真理探究を目的にする哲学（弁証術）との関係を強く主張し、正義、徳などの道徳を重視するアリストテレスが弁論の総合（つまり、弁論の術）を求めたからである。弁論の技と弁論の総合という対立は、「レトリック」と呼んでも、ソフィストとアリストテレスの間には、越えることのできないほどの溝が存在することを示す。古典レトリックと言う時、一般的には、正規あるいは正統と言っていいが、アリストテレスから出発し、キケロ、そしてクインテリアヌスへとつながる流れのことを意味し、ソフィストのレトリックとは明確に区別される。なお、20世紀以降、ソフィストのレトリックが見直され、再認識されてきたことは重要な意味を持つ。また、イソクラテスはレトリックが哲学であるとしたが、それも重要な意味を持つ。正規の古典レトリックの流れからは外されているが、ソフィストのレトリックとイソクラテスのレトリックは、弁論の技であると言い切ったり、真理探究ではなく、レトリックこそが哲学であると言ったり、そこに共感できる部分があるからである。単純な言い方をすれば、弁論の技とする「レトリック」（ソフィスト）、弁論を修辞とする「レトリック」（イソクラテス）、弁論の総合とする「レトリック」（アリストテレス）、「レトリック」という語が意味するところは異なるが、人々を説得するという目的は共通している。古典レトリックの復活が叫ばれている現在、それら3つ全ての復活が必要である。

4：「レトリック」＝「ソフィスト」＝否定的意味

「レトリック」という語には否定的な意味があり、「ソフィスト」という語はさらにひどく、「詭弁家」という訳語が付けられるほどである。否定的な意味を付けた原因は根本的には2つある。1つは、そして最大のものはプラトンである。2つ目はロックである。

プラトンによるソフィスト批判は徹底したもので、現在でもその影響が根強く残っているほどの力を持っている。ソクラテスが生きていた時代、ソフィストの繁栄ぶりは誰も否定できないほど大きなものであった。彼の弟子であるプラトンもその光景を体験した。また、プラトンは、ソフィストでありながら、それを否定して独自の道を進んでいたイソクラテスとも対立していた。都市国家アテネで活躍していた3つの流れの中で、ソフィストのレトリックとも、イソクラテスのレトリックとも対抗し、ソクラテスとプラトンは哲学を最優先して、レトリックを徹底的に否定した。その理由にはいくつもがあるが、主要なものは次のようなものである。

まず、有料の授業がある。ソフィストは授業料を受け取って教授した。しかも、高額な授業料であった。市民が自ら議会で弁論し、儀式で弁論し、法廷で弁論する時代、今の時代で言えば、

国民が自ら国会議員になり、演説者になり、検事・弁護士になって弁論する時代、弁論の技を学ぶことはより豊かに、より幸福に生活する為に、人生の成功者になる為に必要な手段であり、それだけに高額でも支払う価値のあるものであった。それはまた、裕福な者の子弟のみが受けられ、その子弟が成功すれば、またその子弟が受けて成功するという裕福層の循環を意味し、逆に、貧困層の循環を生み出し、貧富の隔絶が永続することを意味する。それに対して、真理という普遍的なものを探求し、真理を教授する哲学者は差別なく全ての人々に教授することが求められ、それは授業を無料で教授することを意味した。大学で高額な授業料を取って授業をしている現在であれば、ごく普通のことであるが、当時は金儲け主義のソフィストという姿が浮かび上がってくる。

次に、勝負がある。ソフィストは、真理かどうかは関係なく、ただ勝つか負けるかだけを競い合うことを目指すと捉えられた。オリンピック競技で選手が勝ち負けを競い合うのと同様であると考えられた。勝つ為にはあらゆる手段を駆使して、たとえどのような手段であっても利用して、相手を納得させ、説得することが絶対視されると思われた。よく言われることであるが、白を黒に、黒を白にする説得の技である。レトリックはそのような弁論の技であると捉えられ、真理探究でない以上、大袈裟に言えば、たとえ嘘であっても説得できればいい訳で、説得だけに集中し、成功を達成する為に何でもするという「詭弁家」と呼ばれた。その背後には、コラク스와ティシアスから始まるレトリックは法廷弁論が中心で、大勢の陪審員に向かって弁護して勝たなければならず、どうしても勝負の性質になってしまう点がある。しかし、アリストテレスは審議弁論が中心で、都市国家の未来について、どのような政策を行うかを審議することになり、都市国家にとって、何が良いかを決めなければならず、真理の追求という性質になっていく。言い換えると、市民の個人レベルでの訴訟の解決、そして都市国家レベルでの政策の決定という相違である。個人レベルでの弁論と国家レベルでの弁論の相違が弁論の捉え方に反映するとも言える。勿論、真理探究を法廷弁論で求めることはできる。ただし、訴訟の場合、真理を受け入れるのであれば、敗訴を受け入れざるを得なくなってしまう。果たして、敗訴を前提にした訴訟というものが考えられるかは疑問である。一般的には、訴訟する側も、訴訟される側も、共に勝ちを求めるものであり、だからこそ勝ち負けが重要になる。それを無視して、ただ真理だけを求めることが可能かは問題になろう。

さらに、プラトン、イソクラテスなどはアテネ出身者であるが、ソフィストは外国人であって、あくまでも外国人としてアテネで活躍した。つまり、アテネ市民としての義務を負うことなく、自由勝手に活躍し、金儲けができる立場にあった。しかも、プラトンとイソクラテスはアテネに固定的な学校を開設し、そこで定期的に教授したが、ソフィストは学校を開いたと言っても、渡り職人のように各地を移動しながら教授した。その意味もあって、カリキュラムに沿って授業を提供したのに対して、弁論の技を実践的に教えたことが対比され、弁論家になる為に求められた条件も異なり、単なる説得を目的とする弁論の技を教えることで済みますかどうかの相違となって現れる。単なる技であれば、弁論家は自分勝手に使用でき、悪用することもできることになる。結局、勝つ為には、いかなる手段であっても使って相手を説得して勝利することが唯一の目的になってしまう可能性がある。それを避ける為には、単なる技ではなく、それを使用する弁論家の人間性が重要になり、それに必要なことも教える必要がある。その相違は弁論だけでなく、弁論家についても、捉え方の相違になって現れる。

2つ目は近代イギリス哲学者のロックである。ロックにとってのレトリック批判は、ソフィストを攻撃目標にして弁論の技を否定したプラトンとは異なり、客観主義、科学主義とは両立し得

ないレトリック＝修辞学に向けられた。例えば、美しく飾り、巧みに表現する美辞麗句は、事実を客観的に、科学的に伝えることができず、むしろ事実をねじ曲げるものにすぎないと考えられた。特に、比喩のように、美しい女性に「君はバラだ」と言う時、文字通りに解釈すれば、女性という人間がバラという植物になってしまい、矛盾することになり、事実を客観的に伝えることはできず、単にねじ曲げているにすぎず、従ってそのような美辞麗句は排除すべきものになる。

結局、古典レトリックを否定するプラトンの場合、ソフィストのような、単なる説得の技にすぎない弁論術が対象になるが、ロックの場合は、事実をねじ曲げる美辞麗句という修辞学が対象になる。従って、レトリック否定と言っても、両者の間には大きな開きがある。ところが、「レトリック」という語に否定的な意味を含める場合、その点が無視されると、全く異なる否定的な意味が混在し、古典レトリックと近代レトリックにおけるレトリックの本来の姿が見えなくなってしまう。

5：「レトリック」としての「比喩」が持つ意味

現代レトリックは比喩である、という特徴づけができる。比喩は古典レトリックにおいても、中世・近代レトリックにおいても、現代レトリックにも現れるものであるが、その背景にあるレトリックの相違が反映したのものになる。古典レトリック＝弁論術＝説得性、中世・近代レトリック＝修辞学＝装飾性、現代レトリック＝比喩論＝表現の経済性という具合に、レトリックの捉え方の相違によって比喩の捉え方も異なってくる。多数の人々を前にして弁論によって説得する時の話し言葉として使用される比喩、そして書き言葉として美しく飾り、巧みに表現する時に美辞麗句に適した比喩は大きく異なる。また、美しく飾り、巧みに表現する為に効果的な比喩、そして言いたいこと、書きたいことを簡潔に、効率よく表現する為に必要とされる比喩も大きく異なる。簡単に言えば、古典レトリックの「比喩」と中世・近代レトリックの「比喩」と現代レトリックの「比喩」は異なる意味を持つ語である。そのような「比喩」という語が単純に同一の意味として使用されれば、当然のこととして、混乱が生じることになる。

特に、現代レトリックについて言えば、一般的には20世紀以降のことであるとされるが、重要なのは第2次世界大戦終結後の1950年代以降で、レイコフに代表される新たな比喩論である。それまでの比喩は真新しい、創造的で、例外的で、特殊なものとして捉えられてきた。それに対して、レイコフは、全ての言語表現は比喩表現であると言い、自ら革命であると宣言する。革命であるかどうかは別にして、言語表現における特殊な表現形式が比喩であるとする比喩論とは異なり、科学から日常まで、話し言葉と書き言葉のあらゆる表現が比喩表現であって、比喩なしには、何も言えないし、何も書けないとされるのである。

それは、革命というよりは、発想の転換であり、新しい視点である。例えば、cold は温度の低さを表す「冷たい」（本義）で、類似性によって、人間の感情の冷たさを表す「冷淡な」（転義）という隠喩になる。従来の考え方であれば、「冷淡な」は日々使用され、誰もが知るようになると、真新しさ、創造性、例外性、特殊性などの性質を失い、誰もが知っており、意識することなく使用できるようになると、それはもはや比喩ではなく、ごく普通の本義の1部になるとされる。分かりやすく言えば、辞書を引いて載っていれば、それは語義であり、本義であるとされる。それを批判して、レイコフは誰もが知るようになって、言い換えると、辞書に語義として載っても、死喩になることは決してなく、生きている比喩であって、そのまま永遠に比喩であり続けると捉えるのである。語は最初の意味として語源があり、そこから比喩などによって語義を増やしていくのが一般的である。それをどのように捉えるかによって、本義とするか、それとも転義と

するか相違であって、その意味では、発想の転換であり、新しい視点から見直されたものである。レイコフとジョンソンの共著『レトリックと人生』を読むと、全ての言語表現が比喩表現であるとする意味が見えてくる。例えば、根源的メタファーである「時は金なり」を元にして、「時間を無駄にする」、「時間がかかる」、「時間がない」などの派生的メタファーが生まれるのであって、時間は抽象的なもので、それをお金にたとえたことになる。そう考えれば、「価格が上がる」は価格変動を「階段を登る」ような物理的な上下運動にたとえたことになり、そのように全ての言語表現を調べれば同じ結果になる。レイコフの理論は隠喩論であるが、それを換喩や提喩に同様の考え方を当てはめれば、同じ結果になる。例えば、「山手線が止まっている」と言えば、山手線という線路が止まっているのではなく、線路の上を走る車両が止まっているのであり、「回転寿司で10皿食べた」と言えば、皿を食べたのではなく、皿の上に乗っている寿司を食べたのであり、「今、我が社には新しい血が必要だ」と言えば、血がほしい訳ではなく、新しい人材がほしいのであり、そのように換喩の例はいくらでも見つけられる。また、「みんなで花見に行った」と言えば、花一般ではなく、桜を見に行ったのであり、「結婚披露宴で尾頭付きが出た」と言えば、魚は尾と頭が付いているのが普通であって、魚なら何でもいい訳ではなく、鯛が出たのであり、「あそこの焼き鳥はおいしい」と言えば、鳩、雀など、鳥なら何でもいい訳ではなく、鶏がおいしいのであり、そのように提喩の例も至る所にある。結局、隠喩だけでなく、換喩も、提喩も、比喩は知らずに、意識することなく、日常的に使用しているのであり、比喩なしには、何も言えないし、何も書けないというのも誇張ではなく、事実であると言える。

そのような比喩、つまり現代レトリックの比喩が説得性や装飾性ではなく、表現の経済性として特徴づけられるのは、より簡潔に、より効率よく表現することを目的にするからであり、円滑にコミュニケーションを取る為である。「君はバラだ」を例として使用すれば、女性の美しさを言っているが、「君は美しい」ではどのような美しさかは不明であり、詳しく表現しようとして「君は美しく、明るく、華やかで、……」と言っても、なかなか言い尽くせるものではなく、ただ長くなるだけで、それでも表現しきれない。それをバラのイメージで表現すれば、たとえ言い尽くせなくても、言いたいことは簡潔で、効率よく表現できるはずである。「君は野菊だ」、「君は百合だ」、「君はカーネーションだ」など、何が、どのように違うかがはっきりしてくる。つまり、たとえを使用すれば、どのようなイメージかが連想でき、たとえが適していれば、かなりの確かに言いたいことを言え、しかも簡潔で、効率よく伝えることができる。そこに、比喩による表現の経済性がある。まさに、比喩を使うことで、比喩なしでは表現できないような表現が可能になる。その意味で、比喩なしには表現できないし、全ての表現は比喩表現であると言える。それが現代レトリックにおける「比喩」の意味である。

6：「直喩」の字義性と「含意」の非字義性

発話（「言う」）は、字義的発話と非字義的発話に分類できる。字義的発話は、言われたことの言語的意味が話し手の伝えたい意図であり、聞き手はその言語的意味を理解すれば、それだけで話し手の意図が分かるもので、言われたことを文字通りに意味を理解すれば、それで話し手の意図は全て分かるものである。非字義的発話は、言語的意味以上のこと、あるいは言語的意味以外のことを伝えるもので、言語的意味を理解しただけでは、話し手の意図が明らかにならないものである。話し手の伝えたい意図が言語的意味以上のところにある場合が含意（グライスの言う「含意」）であり、サールの言う「間接的言語行為」である）であり、言語的意味以外のところにある場合が比喩である。従って、含意と比喩は全く異なるものである。つまり、非字義的発話は言わ

れることと意図されることが食い違う場合で、言われること、そして+αが含意で、言われること以外のことが比喩になる。

その分類を使用すれば、レトリック＝比喩の1部に含意を入れる研究者がいるが、それは比喩とは異なるものであることが明らかになる。また、直喩を比喩の1部として入れる研究者がいるが、それも異なることが明らかになる。含意は非字義的発話に属するが、あくまでも言語的意味以上のことを意味するのであって、言語的意味以外のことを意味する比喩とは異なるものである。直喩は字義的発話であって、非字義的発話である比喩を同一視できるものではない。しかし、これは微妙なところがあって単純化はできない。「比喩」という語は、あるものを別のものでたとえることを意味するのであって、その限りでは、直喩も「比喩」と言えるが、本来の比喩は非字義的発話のことであって、その意味では、直喩という字義的発話を単純に「比喩」とすることができないからである。「君はバラだ」と言い切ってしまうと、文字通りに解釈すると、人間（女性）が植物（バラ）であると言うことになり、意味的な矛盾が起きてしまう。そこには、意味的非両立性がある。ところが、「君はバラのようだ」、「君はバラのように美しい」などは、「ような」(as, like)があるように、文字通りに解釈しても、人間が植物であると言っている訳ではなく、あくまでもバラのように美しい女性のことであって、意味的には矛盾することなく、意味的両立性になる。なお、意味的両立性であっても比喩の場合がある。それは、諷喩である。「汗水垂らして階段を登ってきた」と言う時、文字通りに解釈しても意味は通るし、意味的両立性であるが、もし階段もなく、階段を登った形跡もなければ、文字通りの意味ではなく、苦勞して生きてきたという人生を語っていると解釈することができる。発話の状況とは矛盾するという意味で、状況的非両立性と言えるものである。一般的には、比喩は文段階（詳しくは、隱喩が文段階で、換喩と提喩は語句段階である）のことであって、意味的両立性と意味的非両立性はその文段階で言えることで、たとえ文が意味的両立性であっても、状況と矛盾すれば、比喩の1種である諷喩とされ、その特徴は状況的非両立性である。

「比喩」という語は、何かと何かを「比べて」、「喩える」ことを意味する以上、直「喩」も「喩える」ことには変わりなく、従って「比喩」と呼ばれても間違えではないはずである。そうであれば、サールのように、比喩全てを隱喩とし、全てを集約して隱喩として1本化できると言うこともできるはずである。また、グループμ（ミュー）のように、全てを提喩に集約して1本化できるはずである。いずれにせよ、「比喩」という語をどのように定義するかによって解釈は異なってくるというしかない。

7：「換喩」と「提喩」の区別の仕方

比喩の主要なものとして隱喩と換喩と提喩を挙げるのが一般的である。ところが、分類の仕方に混乱がある。その点を明確にする為に、簡単にまとめてみる。一応、従来型と日本型とアメリカ型と呼び、3つに大別する。

比喩はあるものを別のものでたとえることで、2つのものが関わってくる。関係の仕方では分類するのが従来型で、従来型と言っても、現在でも一般的に受け入れられているものである。2つのものの関係の仕方は、隱喩における類似関係、換喩における隣接関係、提喩における全体と部分の関係のように分けられる。「君はバラだ」は女性の美しさとバラの美しさが類似するから隱喩とされ、「シェークスピアを読んだ」はシェークスピアという作家と彼の作品が隣接しているから換喩とされ、「港に帆が見える」は船と帆が全体と部分になるから提喩とされる。日本型は佐藤信夫、瀬戸賢一などが主張する考え方で、関係の仕方だけでは不十分である為、対象の種類

によって区別するものである。例えば、生徒たちが先生を「ひげ」と呼ぶとして、もしひげが偽物であれば、顔とひげは隣接する関係にあり換喩になるが、本物であれば、顔の1部として生えている訳で全体と部分の関係にあり提喩になってしまう。ひげを引っ張らない限り区別ができなくなり、それでは不十分であると考え。そこで、対象を物理的なものと概念的なものに分けて、換喩が物理的なものを対象にし、提喩は概念的なものを対象にし、隠喩は両方を対象にするとされる。これはグループμの2種類の全体と部分の関係を利用したものである。全体と部分の関係を包含関係（物理的なもの）と包摂関係（概念的なもの）に分けて、物理的なものに関する隣接関係と包含関係をまとめて換喩とし、さらに隣接関係を拡大解釈して、2つを合わせて隣接関係と呼ぶ。そして、概念的なものに関する包摂関係だけを提喩とする。アメリカ型はレイコフなどによって主張される考え方である。関係する領域数によって分けられる。全く異なる2つの領域間で2つのものが類似すれば隠喩と呼ばれ、1つの同一の領域内で2つものが関係すれば、隣接であれ、全体と部分であれ、換喩と呼ばれる。従って、提喩は換喩の特殊事例として組み入れられ、提喩はなくなり、換喩のみとなる。なお、日本型であれ、アメリカ型であれ、隣接関係は拡大解釈され、2つのものが外側で並んでいる時にでも、内側に入って全体と部分になる時でも、外と内の違いはあるが、隣り合っている関係には変わりなく、共に隣接関係とされる。

関係の仕方、対象の種類、関係する領域数、いずれを基準にするかによって隠喩と換喩と提喩についての分類の仕方が異なってくる。従って、「隠喩」にし、「換喩」にし、「提喩」にし、意味が異なり、例の解釈も異なってくる。例えば、「我が社では長髪は採用しない」の人間（全体）と長髪（部分）の関係は、従来型であれば提喩になり、日本型とアメリカ型では換喩になる。「あの店の親子丼はおいしい」の親子（全体、類概念）と鶏・卵の親子（部分、種概念）は、従来型であれば提喩になり、日本型であれば提喩になり、アメリカ型では換喩になる。このように基準が異なれば、意味するものが異なり、結局例までも異なってくる。もしそのままにしておけば、一般の人々や学生だけでなく、研究者にとっても、混乱が生じ、不都合が生まれてしまう。

8：「説得」の解釈の仕方

「説得」という語は広く解釈すれば、様々な形での説得が可能になる。そのこともあって、古典レトリックの目的であり、基本的な特徴である説得は、レトリック全般に対しても使用されることがある。古典レトリックにおいては、言語だけでなく、非言語的手段を全て駆使して説得することである。ソフィストは説得を最大で、唯一の目的であると考え、ありとあらゆる手段を使って説得を勝ち取り、勝負に決着を付けなければならない競技で打ち勝たなければならないのであって、たとえどのような手段であっても、可能な限り、全ての手段を使うのである。アリストテレスにしても、そこまでは認めないが、言語以外でも、話し手の性格をアピールしたり、聞き手の感情にアピールしたり、非言語的手段を使うことを考えている。中世・近代レトリックでは、あくまでも言語それ自体を、美しく飾り、巧みに使いこなして、説得すると言うことができる。現代レトリックにしても、言語それ自体を、簡潔に、効率よく使いこなすことで、説得すると言うことができる。

結局、「説得」という語を使って、レトリック全般を説明することができる。非言語的手段を使うにしても、美しく飾り、巧みに言い表すにしても、簡潔で、効率よく言い表すにしても、最終的には相手が納得して受け入れ、それで説得が成功することが目的になると言えるからである。ただし、説得する相手が必要で、コミュニケーションであることが前提になるが。大勢の人々を

前にして弁論する場合は勿論であるが、小説や詩の場合であっても、美しく飾り、巧みに言い表すことで、読者を感動させ、それで読者が感銘を受ければ、説得に成功したとすることができるし、日常会話やビジネス会話、その他のあらゆる対人コミュニケーションの場合であっても、簡潔に、効率よく言い表すことで、言いたいこと（話し手の意図）を的確に伝えることができ、それで円滑なコミュニケーションが成立すれば、説得に成功したとすることもできる。

「説得」という語を拡大解釈すれば、レトリックそのものが説得を目的にする技術であると言うことは可能である。しかし、古典レトリックにおける説得、中世・近代レトリックにおける説得、現代レトリックにおける説得、それぞれの説得は意味が異なっており、それらを一緒くたにすることは混乱を生み、本来の説得の意味が薄れてしまう。だからと言って、「説得」という語を厳密に解釈して、古典レトリックに限定すべきであると言うつもりはない。説得には様々な方法があるとすればいい。その中で、言語的手段と非言語的手段の全てを使って説得し、相手が納得する状況、言い換えると、人間が人間を説得し、人間が納得する全人間的な関係は、人を前にして全身全霊（まさに、身体全部を使って、心全部を使って）を捧げることができる話し言葉である。そのような状況が古代ギリシャ時代にはあった。そして、現在、レトリック＝比喩論の発展と同時に非言語コミュニケーション論の発展があり、まさに全身全霊を捧げる状況が誕生した。全ての言語的手段と全ての非言語的手段を駆使してコミュニケーションを成立させ、成功させる時代が来た。古典レトリックにおける「弁論」を「スピーチ」、「会話」、「言う」などに言い換えれば、レトリックが求められる時代になったと言える。最近、レトリックの復活、特に古典レトリックの復活が叫ばれるのは、そのような背景があるからであると言うことができる。

9：「レトリック」の再考

レトリックが見直され、再来が必要な現在、「レトリック」という語の使用が混乱して曖昧性を残したままに進むことはできない。そこで、今回は、そのような混乱と曖昧性が何であるかを明らかにし、それを取り除くことを願って説明してきた。現在、大学でレトリック、言語コミュニケーション論、非言語コミュニケーション論、語用論、言語哲学などを教えているが、学生たちは混乱状態にいる。それは、著書、論文、雑誌、辞書、辞典、インターネットなどを見ると分かるように、混乱状態にあるからである。つまり、学生たちの混乱は必ずしも彼女たちに責任がある訳ではなく、彼女たちが得る情報の方が混乱しているのである。単なる日本語訳の問題として片づけられるものではない。もっと根が深く、レトリックそのものの理解に問題がある。これまで、レトリックに関係する語を中心に簡単に見てきた。語の使われ方を見れば、その背後に潜むものを引き出し、明るみに出せると思ったからである。

「レトリック」という語の再考だけでなく、むしろそれを通してレトリックの再考が今必要である。人間は言語で認識し、言語で思考し、言語で判断し、そして行動する。行動も言語を使っているしかない。それは、コミュニケーションそれ自体が言語なしではできないからである。自己に対しても、他者に対しても、社会、国家、世界に対しても、言語を媒介にするしかない。そして、言語は自己を変え、他者を変え、社会、国家、世界を変える力を持っている。まさに、人間は言語を使う動物である。だからこそ、言語をどのように理解し、どのように使い、どのように伝えるかは、人間にとって必要不可欠なことである。その言語を扱うのがレトリックである。基本的な特徴は言語表現の技術である。単なる理論で済ますのではなく、実践を前提にした技術論であり、実践の中で生かせる実践論である。簡単に言えば、自分の言いたいことをいかに言うか、自分の意図をいかに伝えるか、いかに理解させるか、いかに納得させるか、最終的にいかに

説得して、コミュニケーションを保つかであり、その為には、言語的手段や非言語的手段を駆使して相手を納得させることが必要である。相手が納得する為には、相手が信じている個人的な信念だけでなく、むしろそれに影響を与え、規定するもの、つまり集団・組織全体に、社会全体に、国家全体に、世界全体に広く受け入れられている信念に訴えかけなければならない。その意味では、技術や技術論、実践や実践論だけでなく、広く受け入れられている信念を対象にする文化や文化論、歴史や歴史学、社会や社会学、国家や国家論、国際関係や国際関係学など、そしてそれらの影響を受け、規定される個人の心理や心理学でもある。それぞれ2つあるのは、実践、そして実践を前提にし、実践の中で生かせる理論を並べたからである。実践こそが最重要課題であるとするのがレトリックであると考えられるからである。実践なしに、言い換えると、現実なしに、レトリックはあり得ない。現在だけでなく、人間が言語を使い始めてから現在まで、人間の長い歴史はそれ自体レトリックであると言えるし、決して過言ではないであろう。レトリックがないがしろにされてきた過去を振り返ると、例えば、「レトリック」という語が否定的な意味で使用されてきたことを考えると、今こそレトリックの再考が必要であると言いたい。

注：

- (1) 以下の論文が今回のテーマに直接関わるものである。それ以外にも、それに関連する論文はあるが、省略することにする。
- 「隠喩理論：サールとレイコフ」跡見学園女子大学紀要『跡見学園女子大学紀要』第29号、平成8年3月、20～47頁。
- 「隠喩・換喩・提喩—言語表現の考察—」跡見学園女子大学紀要『跡見学園女子大学紀要』第32号、平成11年3月、1～41頁。
- 「ソフィスト再評価について」跡見学園女子大学英文学会紀要『跡見英文学』第13号、平成12年3月、1～13頁。
- 「現代レトリックの流れ」跡見学園女子大学文学部人文学科紀要『人文学フォーラム』第2号、平成16年3月、24～28頁。
- 「真実と表現—レトリックとコミュニケーションを中心に—」跡見学園女子大学文学部コミュニケーション文化学科紀要『コミュニケーション文化』第2号、平成20年3月、32～42頁。
- 「換喩的思考と提喩的思考に基づく行動様式」跡見学園女子大学文学部コミュニケーション文化学科紀要『コミュニケーション文化』第6号、平成24年3月、17～39頁。
- 「話し言葉 vs 書き言葉：アルキダマスについて—翻訳と解説—」跡見学園女子大学文学部コミュニケーション文化学科紀要『コミュニケーション文化』第8号、平成26年3月、7～16頁。
- 「イメージに基づく比喩の危険性」跡見学園女子大学文学部コミュニケーション文化学科紀要『コミュニケーション文化』第9号、平成27年3月、124～129頁。